

《資料その1》

「越の国歴史探訪の手引き」(5/30~5/31)

訪問先：

- 1、気比神宮(敦賀市)
- 2、味真野(越前市) 越前紙の里、岡太神社、越前そばの里
- 3、足羽神社(福井市) 継体天皇石像
- 4、三国湊(坂井市)
- 5、六呂瀬山古墳(坂井市)
- 6、永平寺(永平寺町)
- 7、高島歴史民俗資料館・鴨稻荷古墳(高島市)

1、「越の国」 自然と風土・歴史と文化・・・・・・・・・・ by 川井

①地勢

面積4188平方キロ(全国35位)、人口約78万人(46位)の小県である。

②自然と風土

両白山脈を境に、嶺南は若狭・敦賀、嶺北は白山火山群を乗せる加越山地・越美山地が広がり、平野部は武生・福井を中心に、古代から稲作が始まったと考えられる。

また日本海沿いには南北に低い丹生山地があり、海岸の海食を受けた越前岬・東尋坊・三里浜が奇観を呈す。越前国は七世紀末に越前・越中・越後に分かれたもので、近江の愛発山(あらちやま)の険を越した彼方の意味である。

③歴史と文化

武烈天皇没後、応神天皇五世の孫で「高向」に住む男大迹(ヲホド)王が即位する。継体天皇である。往時の福井平野は低湿な地で水害が多く、王が在野のとき「沼尻」に排水溝を掘り開き、三国湊の基礎を造ったと伝える。福井市周辺には多くの古墳群が発掘されているが王の一族のものであろう。

奈良時代、東大寺の寺領荘園が十余ヶ所設置され、福井の産物が九頭竜川から三国湊に集められ敦賀まで海上輸送、琵琶湖まで陸送し、水路によって奈良の都へ届けられた。

室町時代末期、「吉崎」に拠った蓮如の布教後、一向一揆が蜂起し、また同じころ戦国大名の朝倉氏が台頭したが織田信長に滅ぼされ、その後柴田勝家・佐々成政・前田利家らが支配し、江戸初期には家康の次男、結城秀康が領した。

④文化と産業

冬期の厳しい気象環境から家内工業が発達、機織物を代表として越前刃物・越前和紙・眼鏡フレームなど長い歴史をもつ産業が盛んである。

芭蕉は奥の細道の旅吟で数々の名句を遺し各所に句碑が立ち顕彰されている。詩人 三好達治・作家 高見順は三国湊の出身、また作家 水上勉は晩年、若狭に寓し、「一滴文庫」として記念館が残されている。紫式部が父の越前守赴任により、雪深い北国の冬を経験している。

2、気比神宮

所在地：福井県敦賀市曙町 11-68
主祭神：伊奢沙別命（イサザワケノミコト）
社格等：式内社（名神大7座）越前国一宮

敦賀は天然の良港を有し、北陸道から畿内への入り口であり、朝鮮半島や中国東北部への玄関口にあたる要衝である。気比神宮は「北陸道総鎮守」と称されて古来朝廷から特に重視された神社である。大鳥居は木造では日本三大鳥居に数えられる壮麗な朱塗鳥居であり、国の重要文化財に指定されている。

①創建・由来

『古事記』『日本書紀』では、仲哀天皇 8 年 3 月に神功皇后と武内宿禰が安曇連に命じて気比神を祀らせたとされ、これが神宮の創建とされる。境内社の角鹿（つぬが）神社は「敦賀」の地名発祥地であると伝える。

「ケヒ（気比/筥飯）」の由来としては、「御食津（みけつ）」から「気比」に転訛したとされ、「ケヒ」とは「食（け）」の「霊（ひ）」、すなわち食物神としての性格を表す名称とする説がある。これとは別に、応神天皇と気比神との名の交換を意味する「かへ」から「けひ）」に変化したとする説もある。

②祭神「イザサワケ」について

主祭神はイザサワケで、「イザ」は促し、「サ」は神稲、「ワケ」は男子の敬称。史書には「筥飯」「気比」「御食津」と記され、これは祭神が食物神としての名称であり、敦賀が海産物朝貢地であったことを反映する。祭神は当地の海人族によって祀られた海神であると解される。

一方、『日本書紀』に新羅王子の天日槍（アメノヒボコ）の神宝「胆狭浅大刀（イササノタチ）」との関連性を指摘して、イザサワケを天日槍にあてて新羅由来と見る説もある。

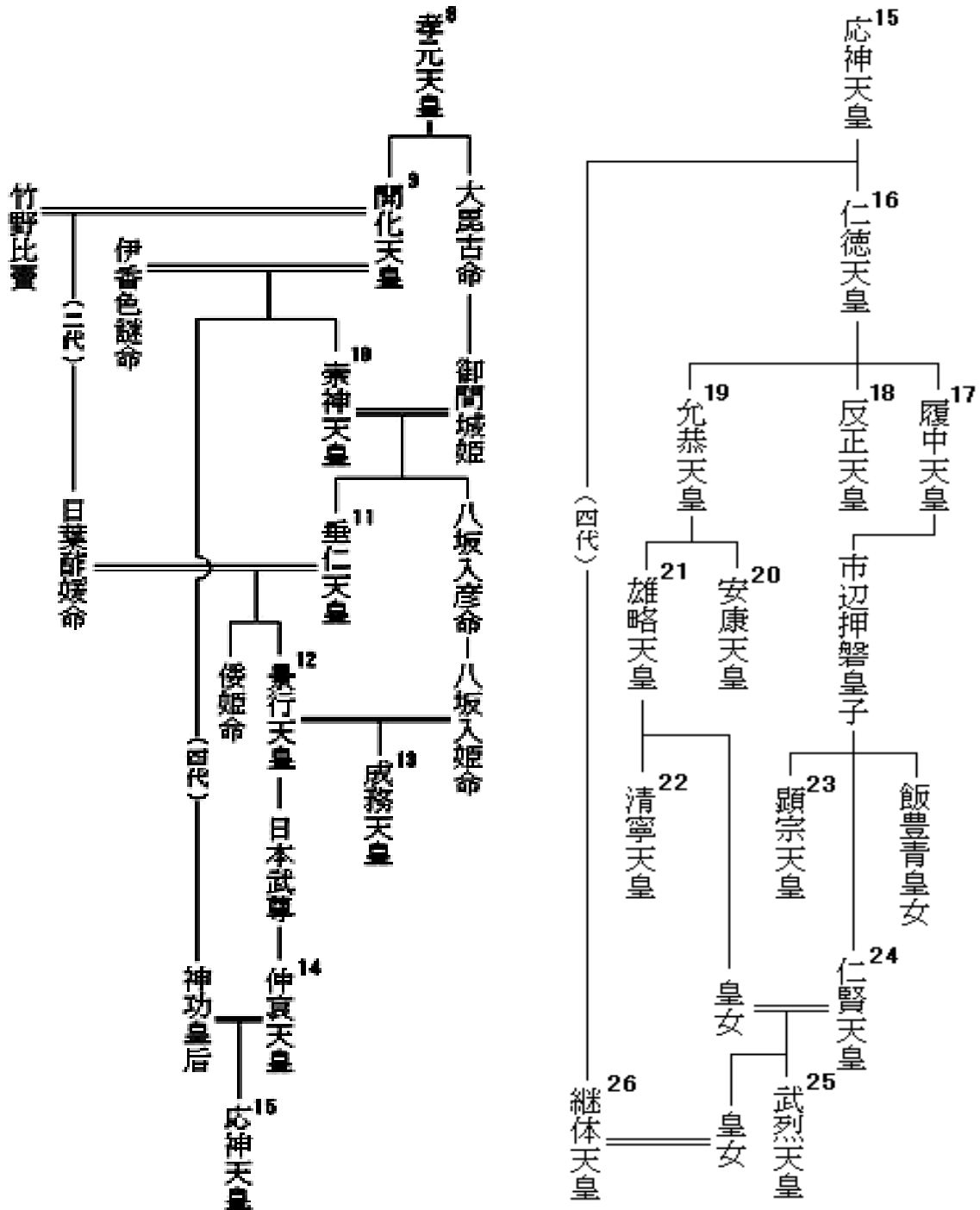
応神天皇の易名説話・・・（古事記・日本書紀）

神功皇后は三韓征伐の帰途に、押熊王・籠坂王の謀叛を平定し、太子（誉田別尊；後の応神天皇）を禊（みそぎ）のため気比神に参詣させる。夢にイザサワケが現れて名を交換するよう告げる（易名説話）。太子が承諾すると、翌朝、浦には入鹿魚が一面に打上げられていた。これにより太子はイザサワケを「御食津大神（みけつのおおかみ）」と称え、のちにその名が「気比大神」となったという。

天皇家の「角鹿海の塩」

継体大王の時代、天皇家で使用する塩は「角鹿の海の塩」に限られていたという。

武烈帝に誅殺された平群大臣真鳥が、すべての塩を呪って死んだが、角鹿の塩だけは呪い忘れたためとされる。この時代、塩は敦賀の重要な産品であったことを窺がわせる説話がある。事実、敦賀から越前海岸にかけては製塩が盛んで、各所の遺跡から製塩土器が出土する。



3、^{あじまの}味真野（越前市）・・・越前紙の里と岡太神社

味真野は、6世紀頃継体天皇が、即位前の時期を過ごしたと伝えられ、世阿弥が書いた謡曲「花筐（はながたみ）」の舞台となった。その御所跡、御学問所跡などの史跡がある。

岡太神社の伝承によれば、約1500年前、男大迹王がこの地におられたころ、大滝町の岡本川上流に美しい姫が現れ、村人に紙漉きの技術を伝えたのが始まりとされている。この伝説の姫『川上御前』を、和紙の神様・紙祖神として祀ったのが、越前「五箇」の地のある岡太神社である。

越前和紙の現存最古のものは8世紀の正倉院の古文書の中にあり、紙漉き自体は7世紀以前からなされていたと思われる。最初は写経用紙を漉いていたが、公家武士階級が紙を大量に使いだすと紙漉きの技術、生産量も向上し、「越前奉書」として最高品質を誇る紙の産地となり、幕府、領主の保護を受けて発展してきた。

日本最古の藩札「福井藩札」や明治新政府の「太政官金札用紙」が漉かれたのもこの越前「五箇」の地である。

明治になって太政官札の紙幣にも使用され、印刷局紙幣寮が設置される。大正12年（1923年）、大蔵省印刷局抄紙部に川上御前の分霊が奉祀され、岡太神社は名実共に全国紙業界の総鎮守となった。

川上御前を日本で唯一の紙祖神として祀っている紙祖岡太神社・大瀧神社は、荘厳華麗な彫刻で有名。国の重要文化財に指定されている。

「越前そば」の由来

越前市は400年の歴史を持つ越前そばの発祥地。

越前そばの生みの親は、(武生)の殿様、本多富正公で、前任地の伏見から、そば職人を連れてきたほどのそば好きで、「越前の大根は、そばによく合う」と、毎日のようにオロシそばを食べたという。

福井県は、ソバの生産量が全国有数のそば処である。蕎麦殻までそば粉に挽き込み、風味が強く、黒っぽい蕎麦となる。冬季であってもつゆは冷たいものを用い、具は大根おろしや刻みネギ、鰹節、刻み海苔程度とシンプルなものが基本。辛味大根特有のピリリとした辛さが特徴である。

《「越前そば」のいわれ》

昭和天皇が第2回国民体育大会秋期大会（昭和22年）にご出席の際、福井にお寄りになり、老舗「うるしや」の盛り蕎麦を召上った。陛下は辛い物や葱が苦手であられたにもかかわらず、なんと2杯も「おろしそば」を召し上がられた。その後も折に触れて「越前の蕎麦」を話題にされたとか。その「越前の蕎麦」が「越前そば」と呼び習わされるようになった言われている。

4、足羽山、足羽神社（福井市）

①地元に伝わる伝承（福井県史より）

継体大王の時代は、現在の福井平野は大きな湖沼であった。大王は湿地の水を日本海へ放流する大規模な治水工事を行い、九頭竜川・足羽川・日野川の三大河川を造ることで干拓に成功した。このため越前平野は実り豊かな土地となり人々が定住できるようになった。続いて港を開き水運を發展させ稲作、養蚕、採石、製紙など様々な産業を發達させた。

②足羽神社

男大迹王はこの地を治めると、まず足羽山に社殿を建て大宮地之靈（おおみやどころのみたま）を祀り守護神とした。これが現在の足羽神社である。越前を離れるとき、この地を案じて自らの御生靈を足羽神社に鎮めて御子の馬來田皇女（うまくだのひめみこ）を齋主としてあとを託した。この伝承から越前開闢の御祖神とされている。



5、振媛の故郷「三国」と「三国湊」

①振媛の出身地「越前三国」

5世紀ごろの三国は、後の律令時代の呼称で言えば「坂井郡、足羽郡、大野郡」を合わせた広範囲の地域を指す。この三国の地は越前国の北部を占め、日本海、加賀、美濃の3域に隣接していた。九頭竜水系流域に広がる福井平野は越前の穀倉地帯となっていた。

越前における時代毎のビッグモニュメント・・・「朝倉氏の一乗谷城址」、「柴田勝家の北庄城」、「結城秀康の福井城」・・・などは全てのこの福井平野とその周辺に存在している。

日本書紀によれば、男大迹（ヲホド）王の生母の振媛は、越の国の三国の坂名井（坂井県）、高向（多加牟久村）の出身とされる。振媛はこの地を治める大豪族三尾氏（或いは三国氏）につながる女性であろうと推察される。坂井市丸岡町には高向神社があり、祭神は振媛とされている。

九頭竜川と越前三国と福井平野



②三国湊

古来より三国湊は、九頭竜川やその支流「足羽川」などを使った水運による物流の拠点で、古くは大和朝廷の水軍の基地として機能したと見られる。また日本海を通して大陸との交渉も見られ、778年(宝亀9)には2年前に来日した渤海(ぼつかい)使を送り届けた高麗殿嗣が渤海の送使とともに三国湊に帰着した(紀)。

古代越前には多数の東大寺領荘園が営まれた。その収穫は九頭竜川を下り三国湊から海路敦賀津に送られ、そこで陸揚げされた。三国湊は大きな役割を果たした。

戦国時代の武将「朝倉義景」が居城を構えた「一乗谷朝倉氏遺跡」内の庭園跡には、船で運ばれてきた東尋坊周辺の岩が庭石として残っている。朝倉氏の後福井を治めた「柴田勝家」も水運を重視し足羽川近くに居城「北の庄城」を構え、荷揚げ用の港を設けていた。

江戸中期になると、「北前船交易」が始まり、三国湊においても、海運で上方(関西)・瀬戸内・山陰・東北・北海道から物品が集まり、物流の一大集積地として賑わいを示す。湊町には北前船を所有する廻船問屋をはじめ、様々な物品を販売する商店らが軒を並べ、町は大きく発展した。その繁栄は、明治に入って鉄道が開通し、物流の中心が船から鉄道へ移りだすと、次第にその輝きを失っていく。

6、六呂瀬山古墳・・・三国の古墳と大豪族三尾氏

4世紀～6世紀にかけて、三国では越前の豪族の盟主を葬ったと思われる前方後円墳が、福井平野を見下ろす丘陵に連なり、時代の盟主墳の系列を示している。

奥越山地を貫流してきた九頭竜川が、福井平野に流れ出た右岸の六呂瀬山頂に「六呂瀬山古墳群」がある。川の左岸の丘陵上には、国史跡手繰ヶ城山古墳をはじめとする松岡古墳群が分布しており、九頭竜川を挟んで両古墳群が対峙した形をとっている。

古墳群の上に立って西方をみると、九頭竜川の形成した坂井平野と日本海が眺望でき、また足羽川流域に広がる福井市街や足羽山などを眺めることができる。北陸最大の前方後円墳「六呂瀬山1号墳」を含むこれら一連の古墳群は、越の国の盟主（王）のものとされ、地元史では、これを三尾氏の系譜と対応させている。

日本書紀には、男大迹王の母振媛は、この辺り（坂井市丸岡町）の出身としており、越前三国の王家につながる女性であったと思われる。

①九頭竜川右岸 丸岡山古墳群、六呂瀬山古墳群・・・(史跡)

福井県坂井市にある古墳群である。標高50～200mの丘陵斜面には総数130基に及ぶ前方後円墳・円墳・方墳が分布しており、「丸岡古墳群」と呼ばれている。六呂瀬山古墳群は丸岡古墳群の一支群でその立地・規模・内容などから、対岸に位置する手繰ヶ城山古墳とともに、4世紀後葉から5世紀前葉にかけての福井平野における、広域首長墓であったとみられる。

②九頭竜川左岸 松岡古墳群・・・(史跡)

福井県吉田郡永平寺町にある古墳群で、九頭竜川の南側、福井平野の東端に位置する尾根上に分布する。手繰ヶ城山古墳（てぐりがじょうやまこふん）等の、前方後円墳4基と陪塚3基からなり、九頭竜川の水利権を押え流域各地区の首長の上に立った「越の国の王」ともいふべき大首長の墓と考えられる。

九頭竜川流域の古墳

| 時期 | 古墳名 | 規模 | 規模・形式 | ロケーション | 地名 | 被葬者 |
|-------|----------|------|-------------|----------|------|-------------|
| 4C前葉 | 足羽山山頂古墳 | 60m | 円墳 | 足羽河畔 | 福井市 | 足羽川水系の盟主 |
| 4C中葉 | 手繰ヶ城山古墳 | 129m | 前方後円墳 | 九頭竜川左岸丘陵 | 永平寺町 | 九頭竜川水域の盟主 |
| 4C後半 | 六呂瀬山古墳1号 | 140m | 前方後円墳 | 九頭竜川右岸丘陵 | 坂井市 | 九頭竜川水域の盟主 |
| 5C初頭 | 六呂瀬山古墳3号 | 90m | 前方後円墳 | 九頭竜川右岸丘陵 | 坂井市 | 九頭竜川水域の盟主 |
| 5C前葉 | 免鳥5号墳 | 91m | 前方後円墳 | 九頭竜川河口部 | 福井市 | 九頭竜川水域の盟主 |
| 5C中葉 | 泰遠寺山古墳 | 64m | 前方後円墳 | 九頭竜川左岸丘陵 | 永平寺町 | 九頭竜川水域の盟主 |
| 5C後葉 | 石舟山古墳 | 79m | 前方後円墳 | 九頭竜川左岸丘陵 | 永平寺町 | 九頭竜川水域の盟主 |
| 5C中 | 鳥越山古墳 | 54m | 前方後円墳 | 九頭竜川左岸丘陵 | 永平寺町 | 九頭竜川水域の盟主 |
| 5C後葉 | 二本松山古墳 | 89m | 帆立貝型を前方後円墳に | 九頭竜川左岸丘陵 | 永平寺町 | 彦大人王？振姫？ |
| 6C中前葉 | 椀貸山古墳 | 45m | 前方後円墳 | 横山古墳群 | あわら市 | 三国氏始祖 梶子皇子？ |
| 6C中葉 | 甘南備山古墳 | 60m | 前方後円墳 | 横山古墳群 | あわら市 | 三国氏？ |

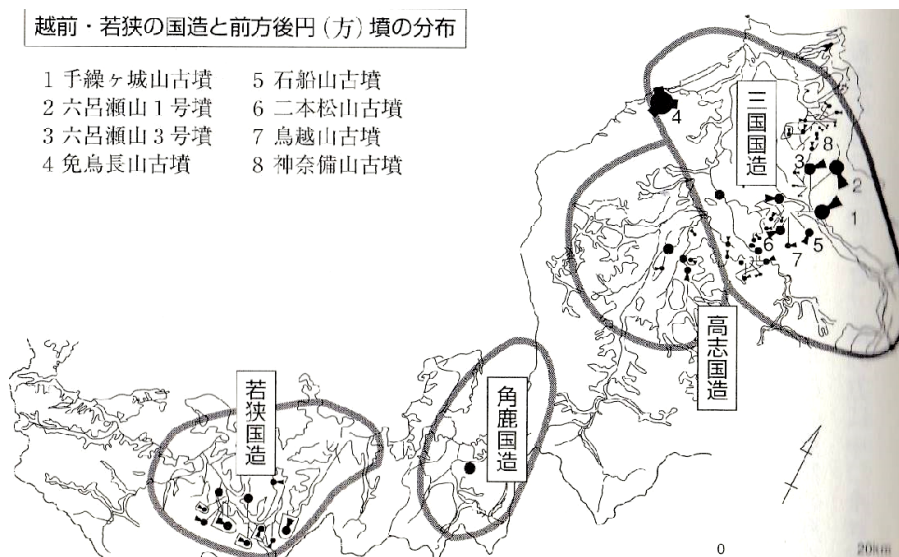
* 「二本松山古墳」は「振姫」の墓とする説がある。この古墳からは、2つの石棺と、朝鮮半島の影響を受けた「金」と「銀」にメッキされた2つの冠が出土しており、多くの副葬品と共に東京国立博物館に収蔵されている。この金銅冠は、日本で最も古いものである。詳しくは、《付記3》を参照ください。

* 6世紀の「椀貸山古墳」や「神奈備山古墳」がある「横山古墳群」は継体天皇の皇子「椀子皇子」或いはこれを祖先とする「三国公や三国真人」一族の墓ではないかと推測されている。



越前・若狭の国造と前方後円(方)墳の分布

- | | |
|-----------|----------|
| 1 手繰ヶ城山古墳 | 5 石船山古墳 |
| 2 六呂瀬山1号墳 | 6 二本松山古墳 |
| 3 六呂瀬山3号墳 | 7 鳥越山古墳 |
| 4 免鳥長山古墳 | 8 神奈備山古墳 |



7、永平寺

福井県吉田郡永平寺町にある曹洞宗の寺院。總持寺と並ぶ日本曹洞宗の中心寺院（大本山）である。山号は吉祥山。開山は道元、本尊は釈迦如来・弥勒仏・阿弥陀如来の三世仏である。

大佛寺山に拠って、溪声山色豊かな幽邃の境に七堂伽藍を中心とした大小70余棟の殿堂楼閣が建ち並んでいる。

永平寺は、今から約760年前の寛元2年（1244年）、道元禅師によって開創された出家参禅の道場。今もつねに2百余名の修行僧が、日夜修行に励んでいる。境内は約10万坪（33万平方メートル）の広さを持ち、樹齢700年といわれる鬱蒼とした老杉に囲まれた静寂なたたずまいは、出家道場として誠にふさわしい霊域である。

8、滋賀県高島市の古墳

①田中王塚古墳・安曇陵墓参考地・彦主人王墓

高島市安曇川町にある直径約58m、高さ約10mの円墳（または帆立貝形古墳）で、5世紀後半の築造とされる。推定築造時期の合致から考古学的にも彦主人王の墓とする説が有力視される。

②鴨稻荷山古墳

高島平野中央部、高島市鴨の鴨川右岸にある古墳である。墳丘は完全に失われているが、墳丘長約50mの前方後円墳であったと推定される。明治35年（1902年）の県道改修工事に伴って家形石棺が発見された。

家形石棺は後円部から掘り出されたもので、蓋の左右の長辺斜面に各2個の縄掛突起をもつ二上山白色凝灰岩製の刳抜式家形石棺である。棺内からは金銅冠、沓などの豪華な副葬品が見つかった。現在これらの副葬品は東京国立博物館に保存されており、石棺は現地の覆屋内で保存されている。（副葬品の一部複製品は、高島歴史民俗資料館で展示）

古墳の築造時期は6世紀前半と位置づけられている。当地で生まれたとされる継体天皇を支えた三尾君（三尾氏）首長の墓であると推定される。

湖西地区の古墳（高島市）

| | | | | | | |
|------|--------|-----|--------|-------|-----------------------|--------------------|
| 5C後葉 | 田中王塚古墳 | 58m | 帆立貝型古墳 | 安曇川水系 | 彦大人王墓？ | 宮内庁参考地 |
| 6C中葉 | 鴨稻荷山古墳 | 45m | 前方後円墳 | 鴨川水系 | 三尾氏の首長か 三国から三尾氏が移動 | 豪華な金銅冠 水尾神社、三尾郷 |

《資料その2》

継体大王ものがたり

プロローグ 倭の武王死す

5世紀の後半、ヤマト政権は雄略天皇の時代にピークに達する。支配は武蔵国の北部から九州中部に及び、鉄の産地、朝鮮半島の加羅国にも強い影響力を保持した。しかし、489年雄略天皇が没すると、王権は一気に衰退する。没後約20年の間に4人の天皇が交替し、最後の武烈天皇に子は無く、ここに皇統は途絶える。伽耶を巡る半島情勢が緊迫する中、権力の空白に国家の一大危機が訪れる。

皇統断絶の危機

政権を構成するヤマトの豪族の間の主導権争いを制した大連大伴金村の主導で、越前三国にあって評判の高い「男大迹（ヲホド）王」の推戴が決まる。「応神天皇5世の孫」とされる男大迹王であったが、仁賢天皇の皇女手白香媛を後に、「入婿」の形で皇位を継承することとなった（507年）。諡号「継体」とはその辺りの事情を物語るものであろう。

注：『日本書紀』では、男大迹王（をほどのおおきみ）、『古事記』では袁本杼命（をほどのみこと）、『上宮記』逸文に乎富等大公王（をほどのおおきみ）。また、『筑後国風土記』逸文に「雄大迹天皇（をほどのすめらみこと）」とある。

越の国の男大迹王

男大迹王が即位した時は既に58歳の老齢、2人の息子がいた。しかし、その前半生について、史書にほとんど記録がなく謎に包まれる。

福井県史（通史編）によると、男大迹王は越の国の発展の礎を築いた大人物と記されており、地元には多くの伝承が残る。同史によれば、九頭竜川の治水に取り組み、湿地だった福井平野を国内一番の稲作地帯へと変容させた。また、国内最高級とされた「越前和紙」産業を興し、越前漆器の元祖とされるなど、国土開発・殖産振興王ともいべき人物であったという。

その出生と生き立ち

父「彦主人（ひこうし）王」は湖北（米原市）に本拠を持つ息長氏の出身とされる。湖西の高島郷三尾野に別業を持ち、男大迹はここで生まれた。母の振媛は越前の九頭竜川流域を支配した豪族三尾氏の出身で、輝くような美人であったとか。男大迹の生後間もなく、父彦主人王が死去したため、振媛は故郷の越前三国の高向（たかむく）に帰って男大迹を育てることにした。

三国湊は北海航路における重要な湊で、朝鮮半島の伽耶国とも直接の交流があり、多くの新羅などからの渡来人集団の居住する国際色豊かな土地であった。このような環境が三尾氏の許で成長した男大迹に、大きな影響を与えたと思われる。

治水と産業振興

それまでの福井平野は、九頭竜川、日野川、足羽川が注ぐ巨大な潟湖であった。男

大迹王は、三国で河口を切り開き、湖水を日本海に流出させ農地化を進める。耕地が拡大し米の生産力は飛躍的に向上した。また、河口に三国湊を開いて水上交通と半島との交易を推進し、稲作だけでなく養蚕、採石、製紙など様々な産業を発達させたと言われる。

古墳時代後期の越前国は、農業が盛んで人口も多く、「延喜式」の記録をみても米の生産高は国内一に達していたと推定され、豊かな地域であったことが分かる。

婚姻政策と鉄

男大迹は、近江、越前、尾張、河内の有力豪族の女性との婚姻を進める。中でも尾張氏の支配する美濃金生山の赤鉄鉱や琵琶湖周辺の砂鉄は、渡来人の製鉄技術と結びつく。古代の近江では 60 ヶ所で製鉄がおこなわれ盛況となるなど鉄の国産化が実現した。また越の敦賀の塩は「天皇家の角鹿海の塩」と呼ばれる重要産品だった。鉄と塩の支配は男大迹王の力の根源となったと思われる。

敦賀・琵琶湖・淀川・瀬戸内海を結ぶ

河内は大連大伴氏の地盤である。渡来系の馬飼集団を率いる河内馬飼首荒籠とは予てから誼を通じていたが、さらに枚方の茨田連とも妃を入れて連携する。敦賀・琵琶湖・淀川・瀬戸内海をつなぐ流通のネットワークを支配するようになる。越前の米、戦略物資の鉄と塩、内外の情報を手中にした男大迹王は、淀川以北の豪族連合の支持を受け、ヤマト王権に拮抗する一大勢力となっていたのであろう。

樟葉宮での即位と遷都

507年 58歳で樟葉の宮で即位した継体大王は、大連大伴金村、大連物部麿鹿火(もののべのあらかひ)、大臣巨勢真人を旧来のまま任用する。しかし、宮は大和国を避けて、筒城宮、弟国宮と淀川水系の要地をめぐる20年にわたる遷都を繰り返す。

その背景の一つに、大和国の旧来の豪族(葛城、巨勢、蘇我)の中に、強い抵抗があったとされ、継体大王は、仁賢天皇の皇女、手白香皇女を皇后に迎えて融和を図り、皇位の正当性を強化する。一方では、雄略期に難波津の整備と大型帆船の普及が実現しており、これが琵琶湖・淀川水運の興隆をもたらした。鉄の生産交易で力を蓄え、さらに要衝の樟葉、綴喜、弟国で支持基盤を盤石のものに固めながら、順次遷宮を重ねたものと考えられる。

継体天皇の治績

継体紀は、内政関係の史料が乏しく、外交関係史料が大部分を占める。中でも特筆されているのが、「任那四県割讓」と朝鮮半島出兵にかかわる「磐井の乱」である。

①「任那四県割讓」

継体6年、百済は任那の上下哆唎・娑陀・牟婁の四つの県の割讓を求めてきた。哆唎の国守穂積臣押山は、「日本から遠くて百済に近く、とうてい維持しがたい」と上奏し、大連の大伴金村がこれに同調して朝議は決する。翌年、百済は五経博士段楊爾を送ってきたが、さらに伴跋国が略奪した汝己・滯沙の地を返還してほしいと要請。ヤマト王権はこれにも応じた。

このように百済は割譲の見返りとして、各種の文化的な使節を送ってきた。五経博士などはその一例であるし、五三八年の仏教伝来もその延長線上にある。親百済政策の結果、日本の文化は大いに進んだのである。しかし、大連の物部麁鹿火と、勾大兄皇子（後の安閑天皇）はこれに反対したといわれ、継体没後に大伴金村が失脚する原因となる。（日本書紀）

②「磐井の乱」

継体 21 年(527 年)、新羅が南加羅などの任那(伽耶)の南部を占領したため、継体大王は、近江毛野臣を将軍に任じ、6 万の兵を率いて任那(伽耶)奪回に向かわせた。新羅は、九州の有力者であった筑紫君磐井に賄賂を贈り、毛野臣を阻止するように依頼する。磐井は九州北部の豪族と連合して反乱を起こし、毛野臣の軍をさえぎる（「磐井の乱」）。

継体大王は、翌年に大連物部麁鹿火を派遣し、1 年半かけて反乱を鎮圧した。その後、朝鮮半島に渡った近江毛野は、軍事的にも外交的にも成果を挙げることができず、無能な暴政は多くの人の忌避するところとなり、毛野は召還され、途中対馬で病没した。

エピソード

謎を秘めた薨去

こうして、越の国出身の継体大王は、国家の危機の登場し、内外の多端な情勢に対応し、即位後 25 年にわたって活躍したが、531 年 2 月 7 日に病により磐余玉穗宮で 82 歳の生涯を閉じた。『日本書紀』では、531 年に、皇子の勾大兄（安閑天皇）に譲位し、その即位と同日に崩御したと記す。

薨去の時期については、日本書紀に引用する『百済本記』に、天皇及び太子と皇子が同時に亡くなったとして、政変で継体以下が殺害された可能性（辛亥の変説）を示唆している。また、『古事記』では継体の没年を 527 年とし、没年齢は約 40 歳としていて、多くの議論を呼んでいる。

御陵は「三嶋藍野陵」で、茨木市太田 3 丁目にある太田茶臼山古墳がこれにあたるとする（宮内省）が、高槻市郡家新町にある今城塚古墳（平成 26 年 5 月に歴文で訪問）をあてる説が有力である。

太田茶臼山古墳の被葬者を継体天皇の曾祖父で、応神天皇の孫の「意富富杼（オホホド）王」に比定する説がある。

継体以降の系譜と蘇我氏の台頭

日本書紀によれば、継体以後の皇位は、尾張系の子子媛を母とする「安閑」、「宣化」天皇へと受け継がれ、さらに葛城系の手白香皇女の子「欽明天皇」へと継承される。

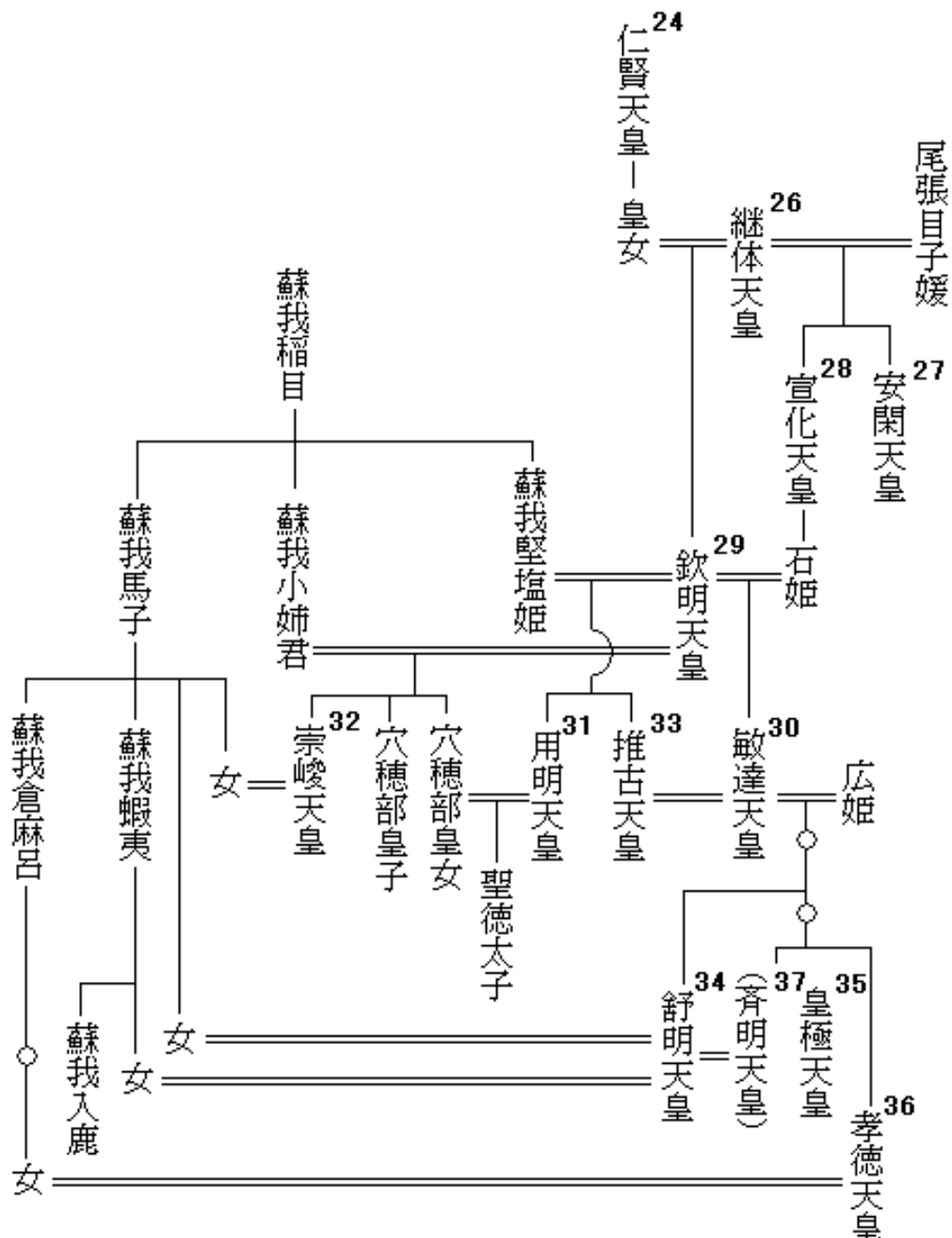
その後、大伴金村は朝鮮政策の失敗を責められて失脚し、代わって宣化天皇の時代から大臣の位に就いた蘇我稲目が頭角を現す。次の欽明天皇に小姉君、堅塩媛を入れ

て大王家の外戚となり政権の中心となる。蘇我系の天皇は、用明、崇峻、推古の3代続く。

舒明天皇の即位で、皇位は蘇我系の皇子から外れて、葛城、尾張の女系につながる皇子へと復帰していくのである。

- ・安閑天皇は、葛城系の仁賢天皇の皇女の春日山田皇女を皇后とする。
- ・宣化天皇は、仁賢天皇の皇女橘仲皇女を皇后として、石姫皇女を生む。
- ・欽明天皇は、石姫皇女を皇后とし敏達天皇を生み、葛城系、尾張系が統合する。
- ・敏達天皇の皇子、押坂彦人大兄皇子は、非蘇我系の皇位承継資格者として、子の舒明天皇に繋ぎ、大化の改新の立役者の中大兄（天智）へと繋がっていく。

(By 古川)



《付記3》

古墳から見た継体天皇……By 坂東

参考文献：日本古墳大辞典、国指定文化財等データベース、ウィキペディア
継体天皇の謎に挑む（越まほろば物語編纂委員会 編）
謎の天王 継体天皇（水谷 千秋）

1. 継体天皇と古墳

前方後円墳が、福井県には約110基があり、その90%が越前の九頭竜川水系にある。これは、この地を治めた強力な豪族（三尾氏など）の存在を示すものである。

わかぬけふたまたのみこ 稚渟毛二派皇子 → おおほどのおおきみ 意富富杼王 → おひのおおきみ 乎非王 → ひこうしのおう 彦主人王 → 継体天皇

1. 福井県？の古墳

松岡古墳群（史跡）、^{ろくろせやま}六呂瀬山古墳群（史跡）、免鳥長山古墳群（史跡）
横山古墳群

2. 継体天皇に関わる古墳

2-1. 今城塚古墳（いましろづかこふん）（史跡）

高槻市郡家新町にある6世紀前半では最大級の前方後円墳である。

継体天皇とするのが学界の定説になっている。

2-2. 太田茶臼山古墳（おおだちやうすやまこふん）、「三嶋藍野陵」

茨木市太田3丁目にある前方後円墳である。宮内庁によって継体天皇陵に比定されているが、5世紀中葉から後半頃の築造と考えられ、年代が一致しない。

被葬者を継体天皇の曾祖父である意富富杼王とする説がある。

2-3. 西山塚古墳（にしやまづかこふん）

天理市^{かよう}萱生町にある前方後円墳である。史跡指定はされていない。

6世紀前半の築造と推定され、継体天皇皇后の^{たじらか}手白香皇女の真陵とする説がある。

2-4. 田中王塚古墳・安曇陵墓（あどりょうぼ）参考地・彦主人王墓

高島市安曇川町にある直径約58m・高さ約10mの円墳（または帆立貝形古墳）で、5世紀後半の築造とされる。考古学的にも彦主人王の墓とする説が有力視

される。

2-6. 断夫山古墳（だんぷさんこふん/だんぷやまこふん）（史跡）

名古屋市熱田区旗屋町にある前方後円墳。6世紀前半の築造と推定される。古代豪族の尾張氏の首長墓になると考えられているが、継体天皇の妃・^{めこひめ}目子媛の父の墓とする説がある。

2. 朝鮮半島との関わり（古墳出土品から）

越前は、朝鮮の伽耶や新羅との交流があったと考えられる。

二本松山古墳から出土した、金銅冠と銀銅冠は伽耶の特徴を持っており、日本では最も古い。朝鮮半島では国王クラスの人が儀式や外国の使節に会う時にこのような王冠を被る風習があり、越の国に朝鮮の文化や風習がいち早く入ってきた事を証明する2個の王冠は貴重なものである。奈良に戴冠の風習が入るのは、その1世紀後で、6世紀の藤ノ木古墳に於いてである。

（参照；古墳資料）

金銅冠出土の主な古墳

①二本松山古墳（1-1. 松岡古墳群）

全長89mを測る前方後円墳で、5世紀後葉頃の築造と考えられる。

②鴨稻荷山古墳（かもいなりやまこふん）

高島市鴨にある古墳で、墳丘は完全に失われている。墳丘長約50mの前方後円墳で、6世紀前半の築造と推定される

③藤ノ木古墳

斑鳩町にある古墳で、6世紀後半の築造で、径約50m、高さ約9mの円墳であるとされている。二人の被葬者があり、諸説がある。

3. 北部九州との関わり

越前は、北部九州とも深く関わっていた。その一つが石棺の形で、剝拔式舟形石棺であり、これは北部九州の影響を受けたものと考えられる。石棺には、足羽山の笏谷石が使われている。

（継体天皇の石棺）

今城塚古墳の埋葬施設は、伏見地震による地滑りのために、失われてしまい、石棺は破片で出土した。3基の家形石棺が納められており、兵庫県高砂産の竜山石、

熊本県宇土産の馬門石「阿蘇溶結凝灰岩：通称ピンク石」、大阪・奈良にまたがる二上山白石、のいずれも凝灰岩で造られていた。継体天皇の石棺には、熊本の馬門石が使われていると考えられる。(3種の石の中で最も高価で貴重)

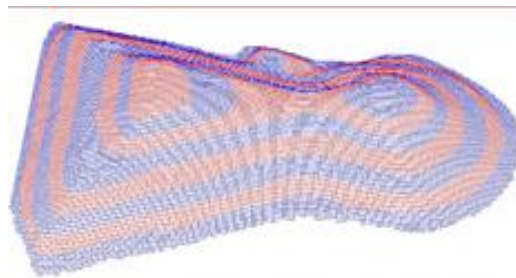
4. 剣菱形古墳

古墳時代後期の一部の前方後円墳には、「剣菱形」と呼ばれる、前方部の中央がへの字のように、やや角張って外側に突き出すような、形状をしているものがある。(なお剣菱形が確認されているのは、極めて数が少なく、継体天皇と深く関連するとみられている。)

《その例》

- ・ 今城塚古墳、断夫山古墳、横山古墳群の2基
- ・ 河内大塚山古墳 (羽曳野・陵墓参考地) ・ (今城塚と五条野丸山古墳の中間に編年)
- ・ 五条野丸山古墳 (橿原・陵墓参考地・欽明天皇と堅塩媛)、
- ・ 鳥屋ミサンザイ古墳 (橿原・宣化天皇陵)、

(断夫山古墳の3D画像)



4. 古墳編年表・・・次葉別表参照

福井の古墳と大和の古墳を編年表に並べた。

《別冊資料》

古代の鉄生産と男大迹王．．．by 中井弘

鉄は西アジアにその起源が求められる。紀元前 3000～前 2000 年頃、自然鉄である隕鉄が使われていた。ほどなく人工鉄が現れ、前 1200 年頃 製鉄技術の開発により大帝国となったヒッタイト帝国(現トルコ付近)の崩壊によって各地に広がったとされる。

1、中国の鉄文化の流入と古代日本の製鉄

中国では紀元前 8 世紀から前 5 世紀(春秋・戦国時代)頃、鉄器の生産が始まる。やがて朝鮮半島、そして縄文時代晩期の日本に伝わった。その時期は朝鮮半島から本格的に弥生時代の農耕技術が流入してきた時期と重なるとされている。

当時、朝鮮半島南部地域と北部九州地域における人的交流は、広義には同一の文化圏を構成していた。鍛冶技術は初歩的な鉄精錬技術と共に、弥生時代前期に半島南部から伝播し、その後新たな技術の伝播を受け、変化発展していった。3 世紀後半ごろまでは朝鮮半島南部と先進地域・北部九州とは比較的似たような技術レベルであったとされる。

古墳時代後期までは、積極的に朝鮮半島の技術を取り入れたが、以後古代国家の基礎を支えた鉄文化は、鉄生産の原理的なものは輸入しても、それぞれかなり工夫して、独自の生産方法を採用していった。後期には外部から大きな技術的影響を受けることなく、独自に変化・発展し、鉄素材は完全自給が出来るようになっていたようである。

2、日本古代の鉄文化

鉄は歴史を大きく変えた革命的素材である。鉄器は武器のほか、鍬先や鎌などの農具に用いられることによって農業生産力が高まり、弥生社会の階層化を進めクニや王を生み出していったとされている。

(1) 古代における鉄器の普及

①縄文時代(前 1 万年～前 5・4 世紀)：鉄器使用の始まりの時代。

縄文時代晩期に日本列島に初めて出現した鉄器は鑄造鉄斧である。中国東北部で大量生産され、朝鮮半島を経由して舶載された。

②弥生時代(前 5・4 世紀～後 3 世紀)：鉄器製作(鑄鉄および可鍛鑄鉄)が行われるようになった時代。

・弥生時代前期には中国で製造された鑄造鉄器が破損すると再加工して使用していた。中期になると半島から可鍛鑄鉄(脱炭鑄物)製の鉄斧が入ってくる。鑄鉄より炭素分が少ない可鍛鑄鉄は軟らかいので敲いて形を変え、ノミ・ヤリカンナ・

ナイフなど小型鉄器に再加工して使用することができた。わが国の鉄器生産は、大陸産の鑄造鉄器を再加工して使用することから始まったとされる。

・朝鮮半島からの鉄素材の輸入拡大

列島に於いて鉄器生産は弥生時代中期から始まったようだ。鉄器の出土状況は北部九州が圧倒的に多く、近畿地方は少ない。鉄素材の需要の大半は大陸・半島からの板状鉄斧・鉄鋌の輸入でまかなわれていた。発掘によってその量は弥生時代後半から急増している。輸入先は半島南部の弁韓と辰韓・伽耶地域が重要な供給地となっていたようだ。

メモ：

福岡空港に近い「板付遺跡」で1978年縄文時代晩期の土器が出土する層の更に下の層から、立派な水田跡が発掘された。「農耕」は弥生時代からという常識は完全に否定された。縄文晩期の土器に付着した吹きこぼれの炭を、国立歴史民俗博物館が「放射性炭素14年代測定法」による化学的な検査の結果、2003年に本格的な水田稲作の始まりがこれまでより500年近く遡る前10世紀ごろと発表した。しかしこれでは中国で鉄が初めて生産された春秋時代よりも早くなってしまう。かつて弥生時代の始まりは前3世紀とされていたが、1980年代に「弥生時代早期」が設定され、前4~5世紀が弥生時代の開始年代とされた。現在学会で研究が続いている。

③古墳時代（3世紀～7世紀）：日本列島で鉄生産（鉄精錬）が始まった時代。

古墳時代にはいると鉄器は量的に多くなり、分布の中心は北部九州から畿内へと移っていったとされる。畿内の大型前方後円墳に多数の鉄器が副葬されており、初期ヤマト政権が北部九州を影響下に組み込んだからとの説が有力である。

・鉄製農具による農業生産の発展

優れた鉄製工具や農具は農業生産力の飛躍的発展をもたらした。首長層にとっては鉄器・武器を大量に所有し、さらには鉄の製造手段を保有することにより、彼らの富・権力の基盤を固め増大させたと考えられる。

古代国家が胎動しはじめる中期には、鍬・鋤・鎌・斧・マサカリ・ノミなど多くの農具や工具は鍛冶鉄器に代っていった。6世紀後半の遠所遺跡（丹後半島）では多数の製鉄、鍛冶炉からなるコンビナートが形成されていた。

（メモ）

2011年淡路島の「五斗長垣内遺跡」では弥生時代後期（3世紀頃）とみられる鍛冶炉を伴った製鉄工場群が発掘された。）

・古墳の大量埋納

中期になると鉄器の生産が急拡大する。応神天皇の陪塚には鉄器埋納専用のものまであり、大量の鉄器が副葬されていた。「ならやま」近くのウワナベ古墳の陪塚か

らも鉄板状に規格化された大量の鉄錠が発掘された。

3、古代の製鉄技術

①鉄鉱石から砂鉄を原料とする製鉄への転換

日本の技術レベルが飛躍するのは古墳時代前期である。高い温度を安定して得ることが出来るよう鍛冶炉が改善された。これら新技術導入は渡来系工人が中心となっていたと推測されている。

弥生時代後期、鉄鉱石を産出する鉱山は中国地方や琵琶湖周辺に限られていたが、やがて鉄鉱石が枯渇した段階で、花崗岩の中に大量に含まれる砂鉄を原料とする精錬へと変化していったようである。

②鉄器製作技術の進歩

古墳時代の鉄器製作技術も格段の進歩をとげた。発掘により鉄鎚（ハンマー）や鉄鉗（かなはし）など新しい加工工具も開発されていたことがわかる。

近畿地方中部には、3世紀後半から4世紀となると熟練した鍛冶技術や鉄製刀剣の製作技術がもたらされた。古墳時代前期の前方後円墳の埋葬施設には、中国製だけでなく、国産の刀剣も多く副葬されている。

③鍛冶技術の革新

古墳時代初期（3世紀後半）に大きな鍛冶技術の革新があり、踏鞴（たたら）の送風技術が格段に進歩した。たたら製鉄は鉄原料として砂鉄を用い、木炭の燃焼熱によって砂鉄を還元し鉄を得る特異な方法で、日本列島独自の精錬方法とされている。

鉄の融点は炭素の含有率によって異なる。鉄を加工する上で最も重要で難しいことは、安定して1000度を超える高温を得ることであった。

④古代の製鉄技術

準備段階として鉄鉱石を採掘し、樹木を伐採して燃料・還元材となる木炭を作る。製鉄炉は粘土を積み上げて構築するが、内部の高温に耐えるために幾層にも種類の異なる粘土を重ねた。燃焼効率を高め炉内を高温にするためには、空気を強制的に送り込む必要があり、その道具が鞴（ふいご）である。皮袋を圧縮して中の空気を送風管を通して炉内に送り込んだ。製鉄炉内の高温となる部分では還元が進み、溶けた鉄・铸铁が得られる。

古代製鉄炉が登場すると、渡来人は専門職集団を形成し、製鉄、精錬、鍛冶といった各工程を担う編成が行われたようである。砂鉄1000貫（375kg）に対し木炭4000貫（1500kg）が必要で、近郊の山が丸裸となると技術集団は木材を求めて移動したと考えられる。

⑤古代製鉄と可鍛铸铁

铸铁の融点は1100度と低い。融点が低いことは鋳物用の材料には適しているの

だが、硬く耐摩耗性に優れているものの、脆いという性質を併せ持つ。そこで還元した鑄鉄を 900 度近い炉の中に、数日放置して鉄表面の炭素分を除去すると、粘りのある「可鍛鑄鉄」となり、火や熱を使うことなく敲いて形を造ったり、研いで刃を付けることが可能になる。このようにわが国の鉄器は大陸産の可鍛鑄造鉄器を加熱することなく再加工して、使用することから始まったようだ。

⑥現在の製鉄高炉（溶鉱炉）（新日鉄ホームページより）

地球上で酸素と結びつき酸化鉄として存在する鉄鉱石とコークスを高温下で化学反応させ、鉄鉱石の酸素を取り除き（還元）、銑鉄を取り出す。（銑鉄とは炭素分を 4~5% 含んだ鉄のこと。この銑鉄の炭素や不純物を、次工程の製鋼プロセスで徹底的に減らすことで、粘りのある強靱な鋼（はがね）を造る。）

近代高炉の原型は、14 世紀ごろドイツ・ライン河の支流で誕生した。当初は熱源及び還元材として木炭を使い、水車の動力でフィゴの送風量を増やし、炉の温度を上げた。

この高炉法は 16 世紀イギリスに渡り、1709 年、森林資源の枯渇から木炭の代替燃料としてコークスを使うようになった。高炉は現在でも銑鉄製造技術の主流である。

参考文献

「鉄の弥生時代」大阪府立弥生文化博物館図録

「日本古代の鉄文化」松井和幸著

「弥生・古墳時代の鉄文化研究」村上恭道著

4、男大迹王の事績

①農地の開墾

男大迹王は、九頭竜川水系の治水事業を推進し、米を主体とした農業の耕地拡大と生産力を飛躍的に向上させている。越前平野は大きな湖沼地帯であったが、そこへ九頭竜川、日野川、足羽川が注いでいた。男大迹王は越前「三国」において河口を切り開き、大湖沼の水を日本海に流出させその跡地を一大農地化する。そして河川の氾濫をも制御したといわれる。

続いて三国港を開き水運を発展させ半島との交易を推進し、稲作だけでなく養蚕、採石、製紙など様々な産業を発達させていったとされている。

②鉄製農具・工具の奨励

越前に於ける代表的な製鉄遺跡として、金津町の細呂木遺跡がある。金津町には 7 世紀頃の製鉄炉の跡が沢山残っている。この遺跡調査によって男大迹王が活躍した 5 世紀後半ごろ、川砂鉄による製鉄が行われていたことが分かった。ここで生産された

鉄は鍬や鋤など木製農具の先端の刃先として加工され、堅い土壌の掘削、特に灌漑水路や耕地造成の効率を大幅に高めたと伝えられている。

③近隣諸国との連合

近江では琵琶湖の東岸に天野川、野洲川、愛知川などが流れる肥沃な湿地帯があり、西岸の高島郡三尾には砂鉄が採れる鴨川が流れている。また尾張氏が進出していた伊吹山の南東には鉄鉱石を産する金生山がある。

継体は各地の豪族の要請に応じて、鉄生産を専門とする技術集団を高島や金生山に派遣して技術移転したと考えられている。さらに湖東地方の湿地帯には、土木技術集団を派遣し、灌漑水路を作り水田に変えていった。婚姻関係でも越前と近江・尾張との同盟を固めていったとされている。

製鉄・灌漑・姻戚関係により協力体制が固まると、越前・近江・尾張の首長連合は強大になり、継体は琵琶湖以北の国をまとめる統率者になっていった。さらに船を使って若狭や敦賀より琵琶湖を経由して淀川・木津川などを通じて、山背・北河内・摂津とも同盟関係を強め、男大迹王が天皇になるための支持基盤を広げていったと考えられる。

④継体天皇の治水伝承

足羽神社に伝わる「越前国神社明細帳」によると

「男大迹王が越前に住んでいたころ、国中に泥水が横溢していたので、人民が農耕できないのを憂い、足羽山に地をトして座摩五神を祀り、厚く神に誓って大いに土工を興し、日野・足羽・九頭竜の三大川を掘り、三国に水門を開いて氾濫を防止した。また道路・溝渠を通じて交通運漕の便を図り、田園を開いて人民を安堵させた」とある。

⑤継体の治世

継体天皇は三尾氏という有力な豪族に支えられて、農業の発展・鉄の採掘・朝鮮との交流などに貢献し、強大な力を持つようになった。さらに周辺の国々とも関係を強固にし、越前だけでなく近江・尾張にまで活動範囲を広げていった。6世紀以後、農業や手工業が発展して生産力があがり、民衆の生活も向上してくる。それを背景として群集墳が爆発的に増加している。当時の越前は、産業が盛んで人口も多く、早くから文化も発達した地域であった。こういった継体天皇の貢献が、今の福井に残る伝統産業や農業の発展の基礎を造ったと考えられる。

参考文献

「継体天皇の地域文化」大同大学紀要

「継体天皇と朝鮮半島」「謎の大王 継体天皇」水谷千秋著